福岡市埋蔵文化財調査報告書第1486集

箱崎 69

― 箱崎遺跡第116次調査報告 ―

2023

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1486集

箱崎 69

－ 箱崎遺跡第116次調査報告 －

遺跡略号　HKZ-116
調査番号　2045

2023

福岡市教育委員会

1．SK021 土層（西から）

2．第２面（１区）柱穴群（南から）

3．調査区中央部土層（北から）

序

福岡市は玄界灘に面し、古来より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。なかでも東区箱崎周辺には、古代から近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建設工事に伴う箱崎遺跡第116次発掘調査について報告するものです。この調査では土坑、溝、柱穴等を検出し、平安時代から江戸時代に至るまでの土器、陶磁器等が出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社 BRIGHT HEARTS をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会
教育長　石橋　正信

例　言

1．本書は令和３（2021）年２月19日から４月９日に福岡市教育委員会が行った、東区箱崎３丁目3263－２所在の箱崎遺跡第116次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に用いた座標系は世界測地系であり、本書の図に用いた方位は座標北である。
3．検出遺構には３桁の連番号を付し、遺構の性格を示す記号として、SK（土坑）、SD（溝）、SP（柱穴・ピット）を用いた。
4．本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博・野村俊之が行った。
5．本書に掲載した遺物実測図の作成は平川敬治・今井が行った。
6．本書に掲載した挿図の製図は野口聡子・今井が行った。
7．本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井・野村が行った。
8．本書に関わる遺物･記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵･保管される予定である。
9．本書の執筆・編集は今井が行った。

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	第116次	遺跡略号	HKZ-116
調査番号	2045	分布地図図幅名	34 箱崎	遺跡登録番号	2639
申請地面積	154.12㎡	調査対象面積	100.45㎡	調査面積	96㎡
調査地	福岡市東区箱崎３丁目3263-2			事前審査番号	20-2-798
調査期間	令和３（2021）年２月19日～令和３（2021）年４月９日				

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 5
　1．調査の概要 …… 5
　2．第１面の遺構と遺物 …… 7
　　①溝（SD） …… 7
　　②土坑（SK） …… 8
　　③その他の出土遺物 …… 11
　3．第２面の遺構と遺物 …… 12
　　①柱穴群 …… 12
　　②土坑（SK） …… 14
　　③その他の出土遺物 …… 21
Ⅳ　おわりに …… 22

挿図目次

第 1 図　箱崎遺跡と周辺遺跡 …… 2
第 2 図　箱崎遺跡と既往の調査地位置図 …… 3
第 3 図　調査区位置図（S ＝ 1/1000） …… 4
第 4 図　調査区位置図（S ＝ 1/500） …… 5
第 5 図　調査区全体図（S ＝ 1/100） …… 6
第 6 図　調査区中央部 土層図（S=1/60） …… 7
第 7 図　SD002 出土遺物 実測図（S=1/3） …… 7
第 8 図　SK013・061・062 実測図（S=1/40） …… 8
第 9 図　SK012・013 出土遺物 実測図（S=1/3・1/4） …… 9
第 10 図　SK061・062・その他の出土遺物 実測図（S=1/3） …… 10
第 11 図　第１面下掘り下げ出土遺物 実測図（S=1/3） …… 11
第 12 図　柱穴群 実測図（S=1/60） …… 13
第 13 図　第２面柱穴出土遺物 実測図（S=1/3） …… 14
第 14 図　SK021・053・088・089・091・092・094・097・117 実測図（S=1/40） …… 15
第 15 図　SK021 出土遺物 実測図（S=1/3・1/4） …… 16
第 16 図　SK053・088 出土遺物 実測図（S=1/3・1/4） …… 17
第 17 図　SK089・091・092 出土遺物 実測図（S=1/3） …… 19
第 18 図　SK094・117 出土遺物 実測図（S=1/3） …… 20
第 19 図　その他の出土遺物 実測図（S=1/3） …… 21
第 20 図　出土銅銭 X 線写真 …… 22

図版目次

巻頭図版　１．SK021 土層（西から）
　　２．第２面（１区）柱穴群（南から）
　　３．調査区中央部土層（北から）
図版１　１．第１面１区全景（南から）
　　２．第１面２区全景（西から）
　　３．SD002（１区）完掘状況（南から）
図版２　１．SK012・013 土層（東から）
　　２．第２面１区全景（南から）
　　３．第２面２区全景（西から）
図版３　１．第２面（２区）柱穴群（北から）
　　２．SK021 完掘状況（西から）
　　３．SK088 遺物出土状況（北から）
図版４　１．SK091 完掘状況（北西から）
　　２．SK092 遺物出土状況（北から）
　　３．SK094 遺物出土状況（北から）

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会（経済観光文化局埋蔵文化財課）は、同市東区箱崎３丁目 3263－２における共同住宅建設工事に伴い提出された「埋蔵文化財の有無について（照会）」を、令和２（2020）年 12 月 18 日付で受理した（事前審査番号 2020－２－798）。埋蔵文化財課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡の範囲にあることから、令和３（2021）年１月７日に確認調査を実施し、地表下 1.55m で埋蔵文化財を確認した。この結果をうけて、埋蔵文化財課は、「埋蔵文化財の有無について（照会）」を提出した申請者に対し、埋蔵文化財が存在することを回答し、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果、事業対象面積 154.12㎡のうち、予定されている共同住宅建設工事による埋蔵文化財への影響が回避できない 100.45㎡について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和３年２月 17 日付で株式会社 BRIGHT HEARTS を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、２月 19 日から発掘調査を開始した。資料整理・報告書作成は令和４年度に行った。

２．調査の組織

調査委託：株式会社 BRIGHT HEARTS

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和２～３年度、整理報告：令和４年度）

調査総括：	文化財活用部埋蔵文化財課長	菅波 正人
	同課調査第１係長	吉武　学（令和２年度）
		本田 浩二郎（令和３・４年度）
調査庶務：	文化財活用課管理調整係	松原 加奈枝（令和２年度）
		井手 瑞江（令和３年度）
		内藤　愛（令和３・４年度）
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係長	本田 浩二郎（令和２年度）
		田上 勇一郎（令和３・４年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	田上 勇一郎（令和２年度）
		森本 幹彦（令和３・４年度）
	同課事前審査係文化財主事	山本 晃平（令和２・３年度）
		三浦 悠葵（令和４年度）
調査担当：	埋蔵文化財課調査第１係文化財主事	今井 隆博

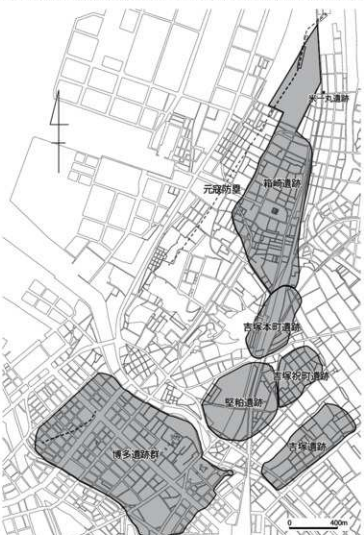
Ⅱ　遺跡の立地と環境

箱崎遺跡は、宇美川下流域の左岸に位置し、博多湾面して南北に延びる砂丘上に位置する。この砂丘は箱崎砂層とよばれており、箱崎付近から室見川河口付近まで分布している。箱崎砂層は、旧河道や鞍部により画された小砂丘群から構成されており、これらの小砂丘上には、箱崎遺跡のほかに、博多遺跡群、吉塚遺跡、西新町遺跡、藤崎遺跡、姪浜遺跡など多くの遺跡が立地している。

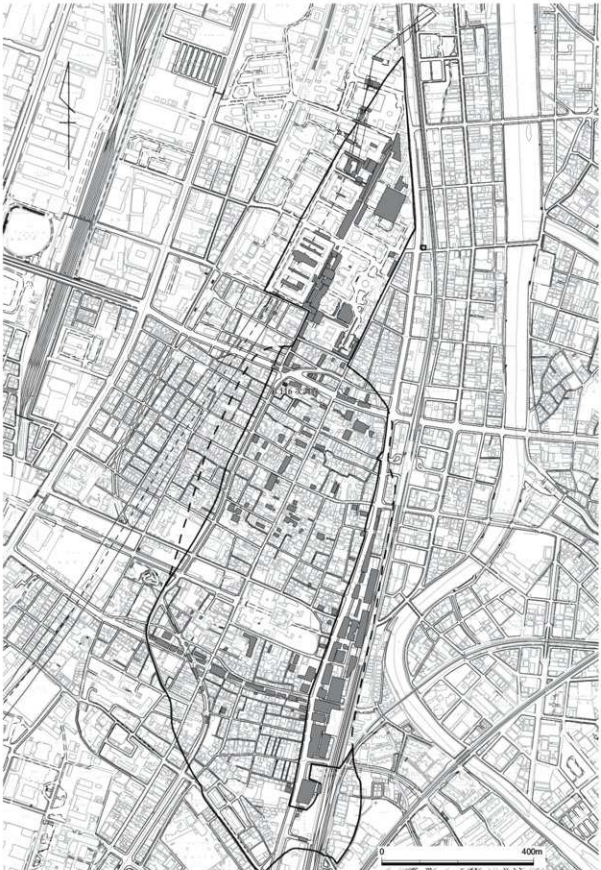
箱崎砂層は地質学の研究成果から縄文時代後期以降に形成されたことが明らかとなっている。箱崎遺跡が展開する砂丘は、東西を宇美川と博多湾に画されており、砂丘西側では博多湾に向かう緩斜面が広がる一方で、東側は宇美川の開析をうけて崖面となっていたと推測されている。遺跡は、筥崎宮付近を中心として南北約 2,200 m、東西約 600m の範囲に広がり、砂丘の標高は 2.0m ～ 3.5m を測る。1983（昭和 53）年に調査が始まって以来、令和 4（2022）年 12 月末現在、これまでに 128 次におよぶ発掘調査が実施されており、遺跡の時代的な変遷が把握されている。

箱崎遺跡で最も古い遺物は刻目突帯文土器や磨製石斧とされているが、これらは後世の遺構からの出土である。集落として安定的に遺構が確認されるようになるのは、古墳時代前期になってからである。遺構は主に遺跡の東側に分布し、筥崎宮の南側の低位部よりも北側で集落が、南側で墳墓群が営まれたことがわかっている。集落域は砂丘の陸側緩斜面に形成されており、古墳時代前期に最盛期を迎え、5 世紀には衰退し、6 世紀には集落は断絶する。一方で、墳墓は断続的に 6 世紀代まで墓域として機能していたようである。竪穴住居からは、蜻壺や石錘などのほか、陶質土器や東海系土器等も確認されており、漁労活動と対外交渉を行う海村としての在り方がうかがえる。

その後、7 世紀～ 9 世紀の遺構・遺物はまばらである一方で、10 世紀前半になると筥崎宮南東部に再び井戸や土坑などの遺構が検出され、官衙もしくは官人居住域であったかのような、越州窯青磁や石製巡方、青銅製権、大宰府系瓦などが出土している。『筥崎宮縁起』によれば、筥崎宮は延長元（923）年に穂波郡大分宮から遷座したとされており、遺構の出現時期に一致する。また、文献史料からは、当該期に筥崎宮の神官を務めた秦氏が太宰府官人を世襲していたと考えられている。



第 1 図　箱崎遺跡と周辺遺跡



第２図　箱崎遺跡と既往の調査地位置図

第３図　調査区位置図（S＝1/1000）

国際貿易の拠点が鴻臚館から博多遺跡群に移動する 11 世紀後半になると、箱崎遺跡においても集落の範囲が拡大していく。この時期の豊前型土師器坏や楠葉型瓦器碗の出土は、11 世紀前半に筥崎宮が宇佐八幡宮および石清水八幡宮とのつながりをもった史実と合致する。港湾施設は、箱崎宮東側の宇美川河口付近にあったと推測されているが、判然としない。

12 世紀中頃になると砂丘西側斜面へさらに集落が拡大し、これ以降 14 世紀初頭までほぼ砂丘全面に遺構が確認されており、遺跡は最盛期を迎える。多量の貿易陶磁に加え、宋商人の存在を証拠づける墨書陶磁器や中国系瓦なども出土する様相は、箱崎が博多と並ぶ国際貿易都市として繁栄していたことを記録する文献史料とも合致している。

箱崎遺跡が立地する砂丘の西側には元寇防塁の推定線が延びており、九州大学箱崎キャンパス内で発見された石積みは、令和２（2020）年及び令和３（2021）年に国指定史跡「元寇防塁」に追加指定された。遺跡の北西側一帯では、13 世紀後半の焼土層が検出される調査地点が多く、1274 年に発生した文永の役の際の兵火に関連する可能性が高いと考えられている。しかし、14 世紀前半に沈没した韓国新安沖沈没船から「筥崎宮」銘木簡が出土しており、東福寺造営料唐船に筥崎宮の関与が想定されることから、少なくともこの時期までは国際貿易都市として存続していたことがわかる。

室町時代になると集落は衰退し、わずかに北端と南端に遺構が確認できる程度となる。

Ⅲ　調査の記録

１．調査の概要

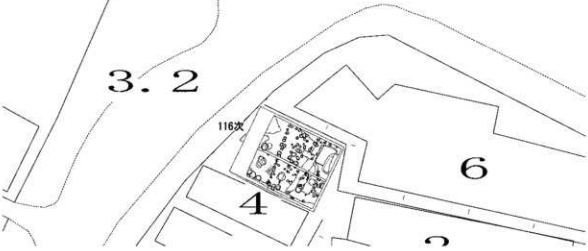
第 116 次調査地点は箱崎遺跡の北西部に位置し、海のある西側に向かって低くなる緩斜面に立地する。東側では 11 次・42 次調査、道路を挟んで北西側では 25・32 次調査が行われている。

11 次・42 次調査では、12 世紀後半～ 14 世紀頃の井戸、土坑などを検出し、西に向かって低くなる地形と、東よりも西に新しい時期の遺構が集中する傾向が指摘された。同様に、32 次調査においても、東側の B 区を中心に、12 世紀後半～ 14 世紀頃の建物跡、井戸、溝状遺構、土坑などが確認され、一帯には 13 世紀代を中心とした集落が広がっていたことがわかっている。なお、32 次調査 B 区では、標高 2.1 ～ 2.4m 付近で、13 世紀後半～ 14 世紀の被熱した陶磁器等を含む焼土層を検出している。一方、32 次調査 A 区及び B 区上層では、15 世紀～近世に位置づけられる遺構・遺物が確認されている。

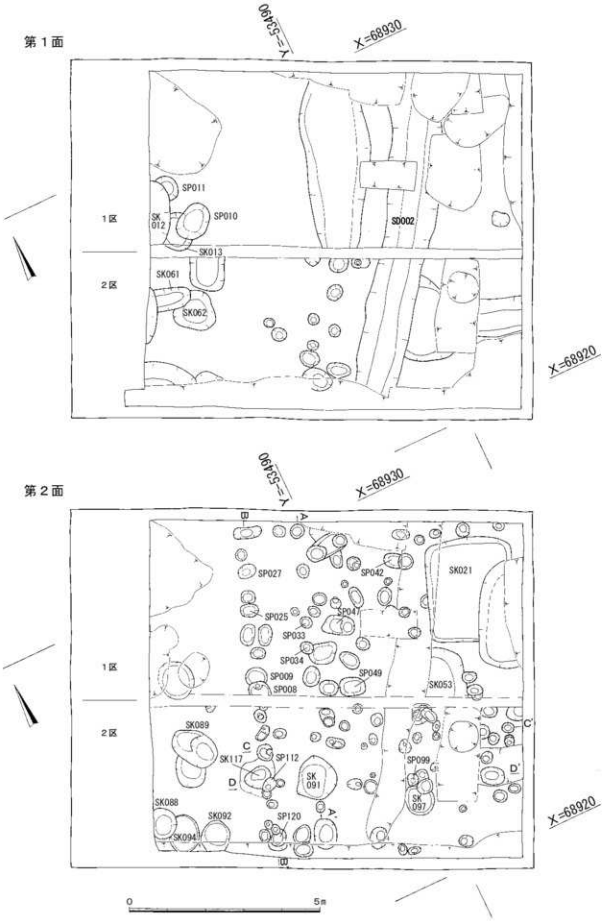
調査は令和３年２月１９日に開始した。遺構面までの盛土等は調査委託者により搬出されたが、敷地面積が狭小であることから、調査の過程で発生する排土を場内で処理する必要があったため、対象範囲を南北に二分割し、第５図のとおり北側を１区、南側を２区として調査を進めることとした。１区は３月３日から、２区は３月 25 日から着手し、遺構面に至るまでの表土は重機により掘削した。４月９日に器材の撤収を行い、調査を終了した。

調査前の現地表面は標高４m 前後を測り、地表面から -160cm までが近現代盛土、そこから 20 ～ 30cm 程度の厚さの暗灰色～灰黄色を呈する遺物包含層が堆積しており、-180cm 前後（標高 2.2m）で基盤の黄色砂となる。西から東に向かって若干低くなる。調査は暗灰褐色遺物包含層上面（標高 2.4m 前後）を第１面、黄色砂上面（標高 2.2m 前後）を第２面として行った。

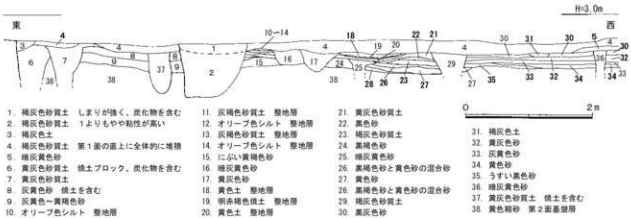
検出した遺構は、平安時代から近世にかけての柱穴・土坑・溝などで、第１面は 14 世紀代、第２面は 12 ～ 13 世紀代に位置付けられる。なお、32 次調査と同様に、第２面とした黄色砂の上面には一部焼土を含む縞状の整地層を確認した。出土遺物は、土師器、中国製陶磁器等で、コンテナケース 25 箱分。第２面で確認した方形竪穴からは遺存状態良好な足鍋も出土した。



第４図　調査区位置図（S ＝ 1/500）



第５図　調査区全体図（S=1/100）



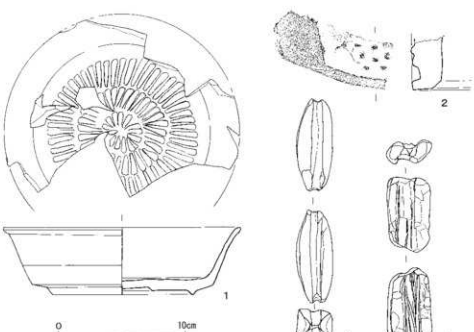
第６図　調査区中央部 土層図（S=1/60）

２．第１面の遺構と遺物

①溝（SD）

SD002（第５図）

調査区東側で、調査区を横断するように長さ約 7.75m にわたって検出した溝である。主軸を北北東－南南西にとる。溝の北側も南側も攪乱に切られる。削平を受けており、溝の底部付近のみ確認できた。検出面の標高は約 2.5m、底面の標高は 1.7m をはかる。溝の幅は広いところで 1.3m、狭いところで 1.1m、溝底面の幅は約 0.5m である。埋土は褐灰色砂質土を主体とする。出土遺物から、明治時代以降に埋没したと考えられる。



第７図　SD002 出土遺物 実測図（S=1/3）

出土遺物（第７・20図）

1は磁器の坏。残存率は1/2程度。胎土は黒色微粒子を含む灰白色で、内面には印花文をスタンプしている。内面から外面高台外側まで淡明青灰色の釉薬をかけている。**2**は軒平瓦。胎土には白色粒が含まれる。**3**は59.01gを測る土錘。部分的に器面が剥がれ破損している。溝幅は0.9cm。**4**は滑石製石鍋の転用品か。中央部に幅1.3cmほどの溝が彫られている。錘の可能性もある。

119は南宋代の銭で淳熙元寶。初鋳は1174年である。**120**は明治６（1873）年に発行された半銭硬貨である。

②土坑（SK）

SK012（第５図）

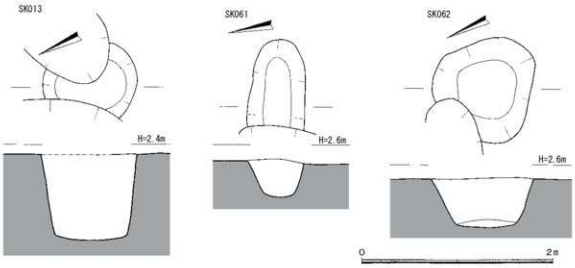
調査区西端で検出した土坑である。西側半分以上が調査区外へと続くため、平面形はよくわからないが、北北西－南南西に長軸をもつ楕円形か。長軸は推定約1.75m以上。標高約2.4ｍで検出し、検出面からの深さは約0.5mを測る。

SK013を切って掘削されていることから、SK013よりは新しい。出土遺物から13世紀前半代以降に埋没した土坑である可能性が高い。

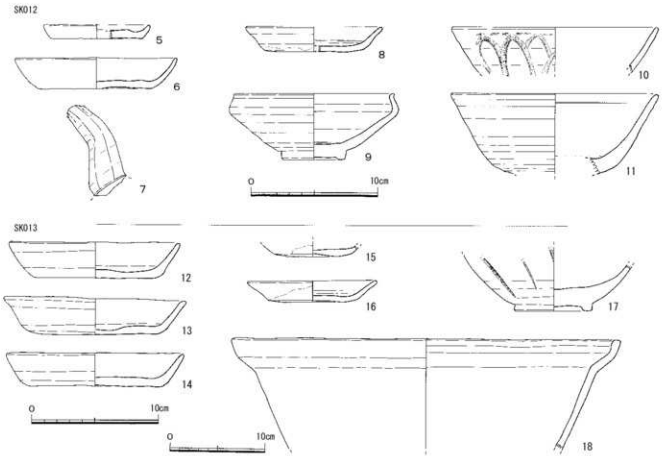
出土遺物（第９図）

5は土師器小皿。残存率1/3程度。全体に歪む。底部は回転糸切りで切り離される。外面はにぶい橙色、内面は灰白色を呈する。**6**は土師器坏。1/2程度欠損。内底部から口縁部の一部が黒化しており、灯明皿として使用していた可能性がある。全体的に灰白色で、底部は回転糸切りで切り離され、板目圧痕が残る。

7は白磁水注の注口部分。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に、灰白色の釉がかけられている。**8**は白磁皿。残存率1/4程度。胎土は灰白色で、黒色微粒子を含む。釉薬はオリーブ灰色で底部は露胎。**9**は同安窯系青磁の東口碗。残存率は1/2以下。灰白色の胎土に明緑灰色の釉薬が施されている。釉は高台畳付きまでかけられている。**10**は龍泉窯系青磁の碗。外側に工具で蓮弁文が描かれている。残存率は1/6程度で底部は欠損する。胎土は灰白色を呈し黒色微粒子を含み、釉薬は灰オリーブ色。**11**も龍泉窯系青磁の碗。残存率は1/3程度で底部は欠損する。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に、オリーブ黄色の釉が内外面にかけられる。



第８図　SK013・061・062 実測図（S=1/40）



第９図　SK012・013 出土遺物 実測図（S=1/3・1/4）

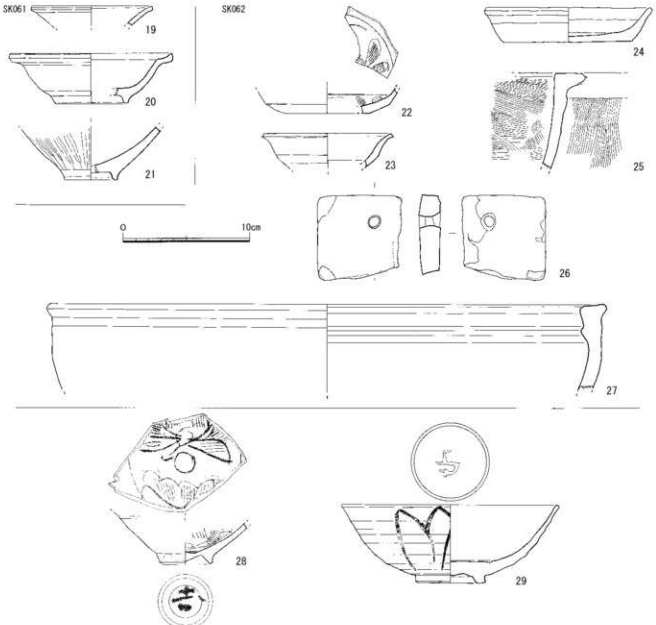
SK013（第８図）

調査区西側中央部で検出した、平面円形の土坑である。東側を SP010 に、西側を SK012 に切られる。直径約 1m。標高 2.3 m で検出し、検出面からの深さは約 0.9m を測る。検出時、北側壁に板の痕跡のようなものがみられたが判然としない。遺構の前後関係から SK013 より古い。出土遺物から 13 世紀前半以降には埋没したと考えられる。

出土遺物（第９図）

12 ～ 14 は土師器坏。12 は口縁部を 1/2 程度欠損している。胎土には白色粒・黒色粒が少量含まれる。灰白色を呈し、底部は回転糸切りで切り離され、板目圧痕がみられる。13 は灰褐色で、略完形。胎土には白色粒を含む。底部は回転糸切りで切り離され、板目圧痕がのこる。14 は残存率 1/2 程度。にぶい赤橙色を呈し、胎土には白色粒を多く含む。底部は回転糸切りされ、板目圧痕がみられる。

15 は龍泉窯系青磁皿。体部を欠損する。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に明緑色の釉薬をかけている。外底面は露胎でヘラケズリの痕跡が観察できる。16 は同安窯系青磁の皿。口縁部を 1/2 程度欠損する。胎土は灰白色で黒色微粒子を含む。灰オリーブ色の釉薬が内面を中心に施されており、外面の一部から底部にかけては露胎となっている。17 は口縁部を欠損する龍泉窯系青磁の碗。外面には工具で花弁文を描く。白色・黒色の微粒子を含む灰白色の胎土に、灰オリーブ色の釉薬が高台外側までかかる。18 は土師器の土鍋。残存率は 1/2 以下。内外面はにぶい橙色から褐灰色を呈し、胎土には白色粒が多く含まれている。内外面ともに工具による調整の痕跡がみられ、口縁部の外面にはススが付着している。



第 10 図　SK061・062・その他の出土遺物 実測図（S=1/3）

SK061（第 8 図）

調査区南西隅で検出した、東西方向に長軸をもつ平面楕円形の土坑である。西側を SK060 に切られているためわからないが、さらに西側に続けば溝となる可能性もある。検出できた範囲では、長軸 0.9m、短軸 0.65m を測る。標高 2.35 m で検出し、検出面から深さ約 0.3m で底となる。出土遺物から 13 世紀後半には廃絶した可能性が高い。

出土遺物（第 10・20 図）

19 は口禿の白磁皿。残存率 1/2 程度で底部を欠損する。胎土は白色微粒子を含む灰白色で、釉薬は淡明灰色。**20** は龍泉窯系青磁の坏。残存率 1/3 程度。白色微粒子を含む灰白色の胎土に明緑色の釉薬を、内面から高台の外側まで施している。**21** も龍泉窯系青磁の碗である。残存率 1/2 程度、口縁部を欠損する。胎土は灰白色で黒色微粒子を含むもので、釉薬は高台の外側の一部までかけられている。

外側は工具により花弁文が描かれている。**118** は北宋銭で聖宋元寶か。一部欠損する。「宋」の字がX線写真でも読み取りにくい。聖宋元寶であれば初鋳は 1101 年。

SK062（第 8 図）

調査区南西隅で検出した、平面不整円形の土坑である。北西側の一部を SK061 に切られる。直径は 1.05 ～ 1.15m。標高 2.45m で検出し、検出面からの深さは約 0.55m をはかる。出土遺物から 13 世紀後半以降に廃絶したと考えられる。

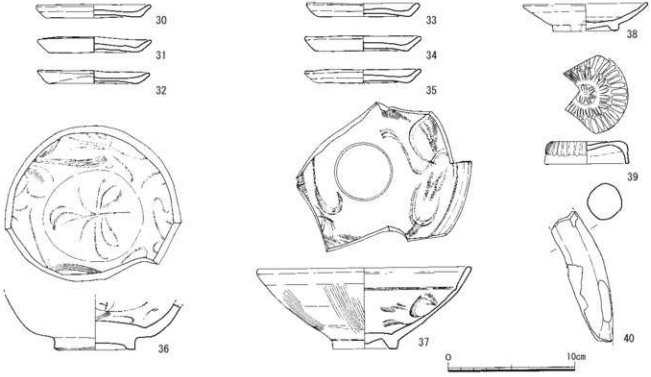
出土遺物（第 10 図）

22 は白磁皿で残存率は 1/4 程度。口縁部を欠損する。胎土は灰白色で黒色微粒子が含まれている。見込みには圏線の中に櫛描文が描かれ、淡明青色の釉薬が底部以外に施されている。**23** は口禿の白磁皿。残存率 1/4 で底部を欠損する。胎土には白色・黒色微粒子が含まれ、灰白色を呈する。釉薬は淡明青色で、外面の底部付近以下は露胎となる。

24 は土師器坏である。残存率は 1/2 程度。にぶい橙色で、底部は回転糸切りで切り離される。**25** は土師器の鍋または鉢の小片。内外面はハケ調整される。胎土には白色粒が多く含まれており、外面はにぶい橙色、内面は暗赤灰色を呈する。**26** は滑石製石鍋の再加工品。用途は不明。重量は 127.9g を測る。**27** は陶器捏ね鉢。にぶい赤橙色の胎土には白色粒が多く含まれている。内外面にオリーブ黒色の釉薬が施されている。

③その他の出土遺物（第 10・11 図）

28 は SP010 から出土した白磁碗。口縁部を欠損する。胎土は灰白色で黒色微粒子を含む。見込みには工具で文様が描かれ、灰白色の釉薬が高台外面まで施されている。畳付きから高台内側は露胎となっており、墨書がのこる。**29** は SP010・011・SK012・013 検出時に出土した龍泉窯系青磁の碗。残存率 1/2 以下。外面には工具で蓮弁文が描かれ、見込みには陽刻のスタンプが押されている。灰白色の胎土にオリーブ黄色の釉薬が高台内側までかけられている。



第 11 図　第 1 面下掘り下げ出土遺物 実測図（S=1/3）

30 ～ 37 は、第 1 面から第 2 面への掘り下げの際に 2 区中央付近で集中して出土した。遺構として把握できなかったものの可能性がある。30 ～ 35 は土師器小皿。30・31・32・34・35 は完形。33 は一部欠損する略完形。すべて底部は回転糸切りで切り離され、板目圧痕が残る。30 は灰白色で、胎土には白色粒が少量含まれる。内面底部は定方向ナデ調整される。31 は浅黄橙色から灰白色を呈し、胎土に白色粒・雲母を含む。32 は外面から口縁部にかけて黒斑がつく。淡橙色で、胎土には白色・黒色粒が少量含まれる。回転横ナデの後、内面底部は定方向ナデで仕上げている。33 ～ 35 の胎土には白色粒が少量含まれている。33･34 は淡黄橙色を呈し、内面底部は回転横ナデの後定方向にナデ調整される。35 は淡橙色で、外面と口縁部が黒化しており、灯明皿として使用された可能性が高い。36 は龍泉窯系青磁の碗。胎土は白色微粒子を少量含む灰白色を呈する。内面には全面に工具で文様が描かれている。緑灰色の釉薬を外面全体に施しており、一部畳付きまで及んでいる。37 は同安窯系青磁の碗。口縁部の大半を欠損している。胎土は黒い微粒子を含む灰白色で、内外面に櫛目文を施す。明緑灰色の釉薬を全体にかけているが、体部下半は露胎である。土器集中部から出土した資料は、12 世紀後半代のものが多いようである。

38 は一部欠損する白磁皿。黒色微粒子を少量含む灰白色の胎土に、灰白色の釉薬を体部外面までかけている。釉は一部高台外側にまで及ぶ。39 は青白磁の合子の蓋。蓋の外面には菊の花のモチーフが彫られている。胎土は灰白色で精良。40 は瓦質土器の鍋の脚。灰色を呈し、胎土には白色粒が多く含まれている。117 は寛永通宝。初鋳は 1636 年である。

3．第 2 面の遺構と遺物

①柱穴群（第 5・12 図）

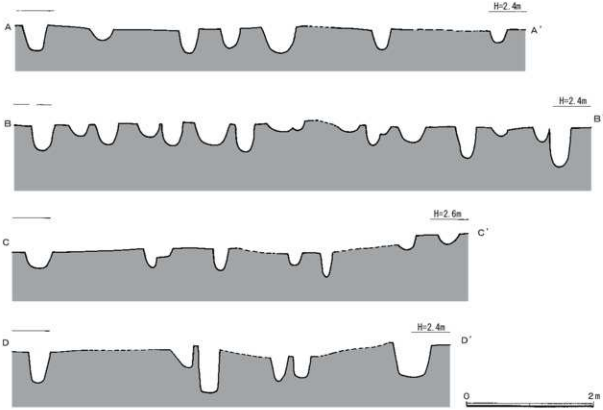
第 2 面では 1 区・2 区ともに中央付近で多数の柱穴を検出したが、軸は揃うものの、建物として柱穴をまとめることができなかった。便宜的に A-A′、B-B′、C-C′、D-D′ の四箇所で断面図を作成した。

A-A′ 及び B-B′ は、調査区中央部に位置し、長軸を略南北にとる柱穴群である。柱間距離は一定しない。柱穴は直径 0.3m ～ 0.55m の不整円形プランをなし、検出面から 0.2m ～ 0.65m 残存する。柱穴の底面の標高は、A 列では標高 1.8m 前後で概ね揃うが、B 列では標高 1.4m ～ 1.8m で南側の柱穴がやや深い傾向がある。

C-C′ 及び D-D′ は、2 区中央に位置し、長軸を略東西にとる柱穴群である。柱間距離は一定しない。柱穴は直径 0.2m ～ 0.6m の不整円形プランをなし、検出面から 0.2m ～ 0.7m 残存する。柱穴の底面の標高は、C 列では標高 1.8m 前後で概ね揃うが、D 列では標高 1.8m ～ 2 m を測る。

出土遺物（第 13 図）

44 は SP025 から出土した白磁皿。残存率 1/4 程度で底部を欠損する。黒微粒子を含む灰白色の胎土に、灰白色の釉薬をかけるが、外面体部下半及び内底面は露胎。45 は SP027 から出土した龍泉窯系青磁皿の破片。底部を欠損する。胎土は灰白色で黒色微粒子が含まれる。オリーブ黄色の釉薬が内外面にほどこされている。46・48 は SP033 から出土した。46 は土師器坏。残存率 1/3 程度。浅黄橙色を呈し、底面は回転糸切りの痕跡と板目圧痕が残る。内底面は回転横ナデの後に定方向のナデ調整で仕上げている。48 は瓦器碗の破片。灰色から灰白色で、焼成は良好。内面のみミガキの痕跡が観察できる。47 は SP034 から出土した土鍋の口縁部片。灰褐色から赤褐色で、胎土には白色粒を多く含む。51 は SP112 から出土した青白磁合子の蓋。天井部を欠損する。残存率は 1/4 程度。胎土は黒色微粒子を少量含む灰白色で、釉薬は淡明青色。外面口縁部付近から内面天井部付近までは露胎となる。

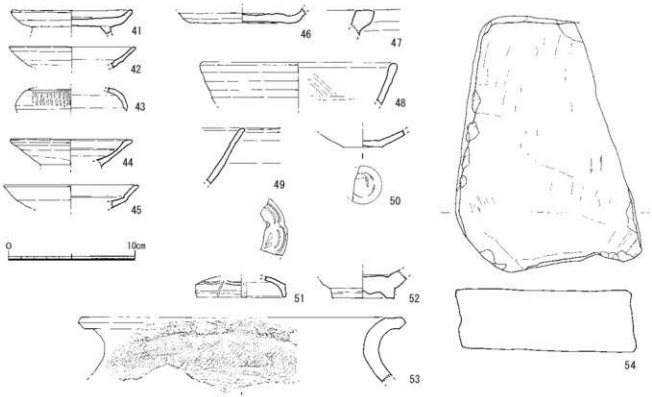


第 12 図　柱穴群 実測図（S=1/60）

その他の柱穴出土遺物（第 13 図）

41・42 は SP008 から出土した。**41** は高台付きの土師器小皿。残存率は 1/2 程度で、高台の端部は欠損する。淡橙色を呈し、底部は回転糸切りで切り離され、内面底部は回転横ナデの後にナデ調整される。**42** は白磁皿。残存率は 1/2 以下で、体部下半以下を欠損する。灰白色の胎土に灰白色の釉薬をかけている。内底部近くの釉を掻き取っている。

43 は SP009 から出土した、青白磁合子の蓋の破片である。天井部も口縁端部も欠損する。胎土は灰白色で、淡青白色の釉を施している。**49** は SP042 から出土した白磁碗の破片。灰色の胎土には黒色微粒子が含まれ、釉薬は灰白色。**50** は SP047 から出土した陶器の底部片。壺か。残存率は 1/2 超。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。外面は露胎で内面に褐色の釉がかかる。外底面に墨書が残る。**52** は SP119 から出土した龍泉窯系青磁碗の底部である。灰白色の胎土にオリーブ黄色の釉薬がかかり、底部下半から高台は露胎となる。**53** は SP120 から出土した土器の甕の口縁部片。残存率は 1/4 程度。灰色を呈し、胎土には白色粒が含まれる。外面にはタタキの痕跡が明瞭に残っている。口縁部付近から内面は横ナデおよびナデ調整を施す。**54** は SP099 から出土した石製品。台石か。残存重量は 2300g 超。



第 13 図　第 2 面柱穴出土遺物 実測図（S=1/3）

②土坑（SK）

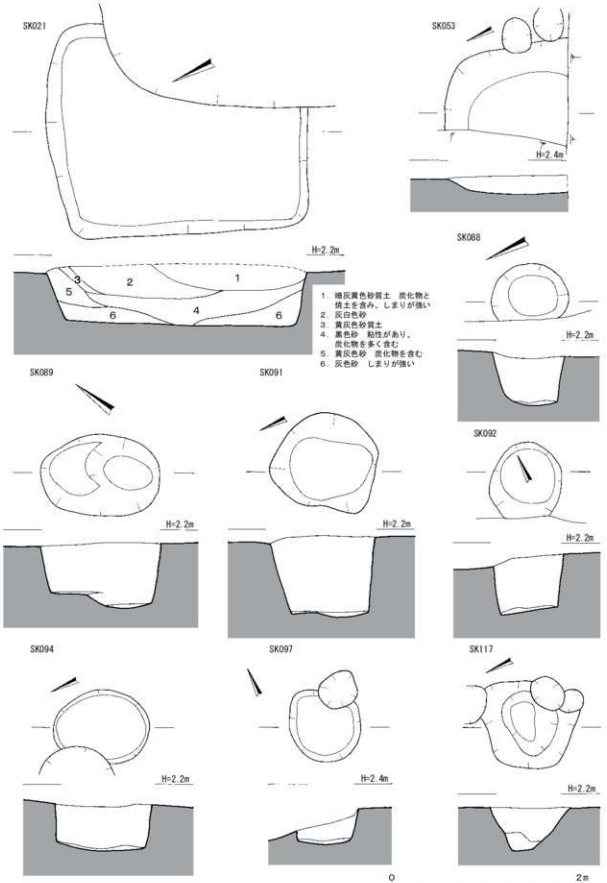
SK021（第 14 図）

調査区北東隅で検出した、平面方形の土坑である。東側を別の遺構に切られる。南北約 2.8m、東西約 2.3m を測る。標高およそ 2 m で検出し、検出面から深さ約 0.65m で底となる。埋土は、上層は灰黄色～灰白色砂質土、下層は粘性のある黒色砂～灰色砂である。出土遺物から、13 世紀前半代以降に埋没した可能性が高い。

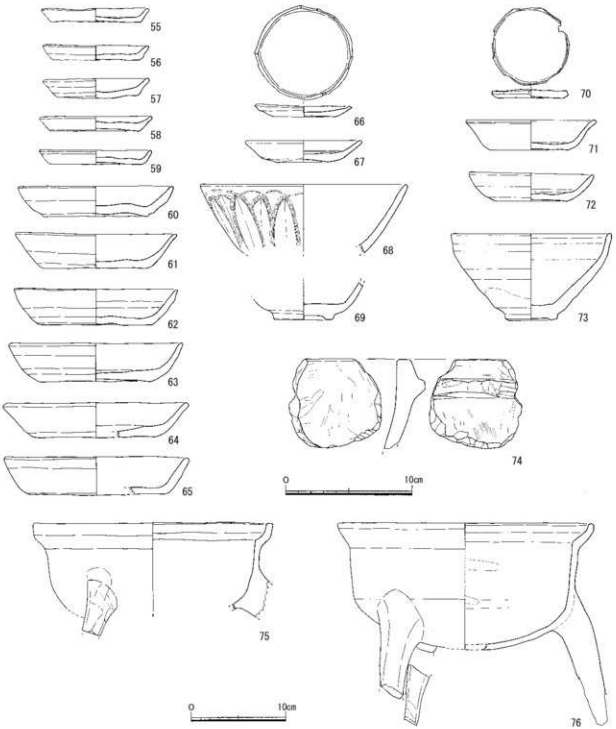
出土遺物（第 15 図）

55 ～ **59** は土師器小皿。**55**・**56**・**57**・**59** の底部は回転糸切りで切り離され、板目圧痕が残る。また、回転横ナデ後、内底面を定方向にナデで仕上げている。**55** は残存率 1/2 以下。胎土は灰白色で白色粒が多く含まれる。**56** は略完形。胎土は灰白色を呈し、白色粒を少量含む。**57** は完形。淡橙色を呈する。胎土には白色粒を含む。**58** は残存率 1/2 程度。底部は回転糸切りで切り離される。内底面は回転横ナデ後ナデ調整。**59** は残存率約 2/3。褐灰色の胎土には白色粒を多く含む。外面と内面口縁部付近にススが付着しており、灯明皿として使用された可能性が高い。

60 ～ **65** は土師器坏。**60** ～ **63** はすべて回転糸切りで切り離され、全体を回転横ナデした後、内底部を定方向にナデ調整して仕上げている。**60** は残存率 1/2 程度。灰白色を呈し、胎土には白色粒と雲母が含まれている。**61** は口縁部の一部を欠損する。褐灰色で、胎土には白色粒が多く含まれている。外面の広い範囲にススが付着している。**62**・**63** の残存率は 1/2 程度。ともに灰白色を呈する。胎土には白色粒と黒色微粒子を含む。**64** は 1/2 程度残存し、底部を欠損する。底部は回転糸切りの痕跡がみられる。灰白色を呈し、胎土に白色粒を含む。**65** も残存率 1/2 程度で底部を欠損する。底部は回転糸切りで切り離されている。灰白色で胎土には白色粒が多く含まれている。内面に斑状にススが付着し、外面の一部にもススの付着がみられる。

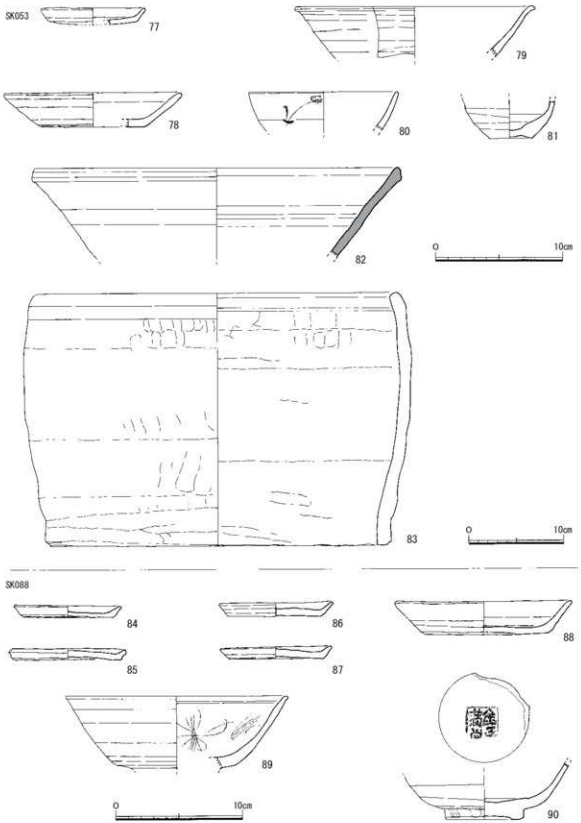


第 14 図　SK021・053・088・089・091・092・094・097・117 実測図（S=1/40）



第 15 図　SK021 出土遺物 実測図（S=1/3・1/4）

66 は同安窯系青磁皿か。底部を残して打ち欠き、瓦玉としている。胎土は灰白色で黒色微粒子を含む。浅黄色の釉薬が内面と外面にかけられるが、底部付近は露胎となる。**67** は同安窯系青磁皿。残存率 1/2 程度。灰白色の胎土には黒色微粒子が含まれている。浅黄色の釉薬が施されるが、外面底部付近は露胎。**68** は龍泉窯系青磁碗。残存率 1/4 程度。白色・黒色微粒子を含む胎土は灰白色を呈する。外面には工具により蓮弁文が描かれ、明オリーブ灰色の釉薬がかけられている。**69** も龍泉窯系青磁碗の底部。胎土は灰白色で白色・黒色微粒子を含む。明緑灰色の釉薬は内面および外面、畳付まで及ぶ。



第 16 図　SK053・088 出土遺物 実測図（S=1/3・1/4）

70 は白磁皿。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰白色の釉薬がかかる。坏部は打ち欠き、瓦玉としている。71 も白磁皿。残存率は 1/2 以下。白色微粒子を含む胎土に灰色の釉薬がかけられている。72

は略完形の白磁皿。胎土は灰白色を呈し、白色・黒色微粒子が少量含まれる。明灰色の釉薬が底部以外の全面に施される。**73** は禾目の天目茶碗。体部状半を 2/3 程度欠損する。外面底部付近から高台にかけては露胎。胎土は灰色を呈し、白色粒を多く含んでいる。

74 は滑石製石鍋の口縁部片。**75・76** は土師質の足鍋。ともに残りはよい。**75** は、内面は明褐色、外面は赤黒色を呈し、胎土には白色粒が多く含まれる。内面はハケ調整、外面は工具によるナデ調整がみられる。外面は全体的にススが付着しているが、口縁部外面と足周辺はとくに顕著である。**76** の内面は明赤灰色、外面はススの付着により黒色を呈する。胎土には **75** と同様に白色粒を多く含む。内面には工具によるナデ調整の痕跡がみられ、底部付近にはコゲも観察できる。

SK053（第 14 図）

調査区東側で検出した土坑である。SK021 の南側に位置し、南側をトレンチに、西側半分を SD002 に切られるため平面形は不明である。残存しているのは南北 1.3m、東西 1.1m である。標高 2.2 m で検出し、検出面から深さ約 0.15m で底となる。出土遺物から時期を判断するのは難しい。肥前系陶磁器（第 16 図 80）が含まれているが、第 1 面で検出した近代溝 SD002 からの混入の可能性もある。近世に下る可能性もあるが、少なくとも 12 世紀後半以降に埋没したと考えられる。

出土遺物（第 16 図）

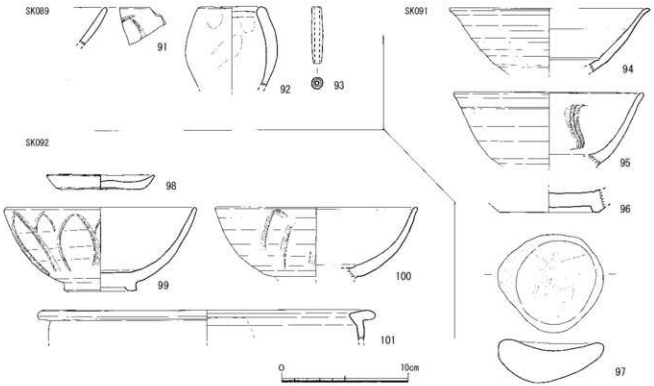
77 は土師器小皿。残存率は 1/3 程度。灰白色を呈し、胎土には白色粒を含む。底部は回転糸切りで切り離される。内底面は、回転横ナデ後に定方向のナデ調整で仕上げている。**78** は土師器坏の破片。底部を欠損する。灰白色で、胎土には白色粒が含まれている。底部には回転糸切りの痕跡がみられ、内面には部分的にススが付着している。**79** は白磁碗。残存率 1/6 程度で底部を欠損する。灰白色の胎土に灰白色の釉薬がかかる。体部下半以下は露胎となる。**80** は肥前系磁器の碗の破片。底部を欠損する。胎土は灰白色で黒色微粒子を含む。浅藍色の絵の具で文様が描かれている。釉薬は淡青灰色。**81** は陶器壺。上半部を欠損する。胎土には白色・黒色微粒子が含まれ、灰白色を呈する。オリーブ黄色の釉は外底部にまでおよぶ。**82** は須恵器捏ね鉢。残存率は 1/8 程度。灰色で、胎土には白色粒を多く含んでいる。**83** は不明土製品。残存率は 1/2 程度。胎土は白色粒を多く含み粗い。外面はにぶい橙色、内面は黒褐色を呈する。内外面ともに工具によりナデ調整されているが、器面には凹凸がのこる。口縁部周辺と底部内面にススが付着している。かまどとして使われたものか。

SK088（第 14 図）

調査区南西隅で検出した平面不整円形の土坑で、直径は 0.7 ～ 0.8m を測る。標高 2.1 ～ 2.0 m で検出し、検出面から深さ約 0.65m で底となる。出土遺物から 12 世紀後半代以降に埋没した可能性が高い。

出土遺物（第 16 図）

84 ～ **87** は土師器小皿。すべて回転糸切りで切り離されており、**84** のみ板目圧痕の痕跡がみられる。**84** は 1/3 程度欠損する。にぶい橙色を呈し、胎土には白色粒を少量含む。内底部は回転横ナデの後、定方向のナデで仕上げている。**85** は略完形。浅黄橙色で、胎土には白色・黒色微粒子が含まれている。**86** は完形。にぶい橙色を呈し、胎土には白色粒を含む。**87** は略完形。にぶい橙色で胎土は精良。内面は摩滅により調整が観察できない。**88** は土師器坏。淡橙色を呈し、胎土には白色粒を少量含む。底部には回転糸切りの痕跡と板目圧痕が残る。内底面は回転横ナデの後、定方向のナデ仕上げ。**89** は龍泉窯青磁碗。残存率は 1/3 程度で底部を欠損する。胎土は灰白色で黒色微粒子が少量含まれる。内面には櫛状工具により文様が描かれ、緑灰色の釉薬が全面に施されている。**90** も龍泉窯系青磁碗。上半部を欠損する。胎土は白色微粒子を含む灰色。内面見込みに「金玉満堂」がスタンプされている。オリーブ灰色の釉薬は畳付にまで及ぶ。



第 17 図　SK089・091・092 出土遺物 実測図（S=1/3）

SK089（第 14 図）

調査区南西隅で検出した、平面楕円形の土坑である。北西－南西方向に長軸をとり、北西側に段をもつ。長軸は 1.25m、短軸は 0.85m。標高 2 m前後で検出し、検出面から段までの深さは約 0.5m、検出面から底面まで 0.7m をはかる。出土遺物から遺構の時期の詳細を判断するのは難しい。

出土遺物（第 17 図）

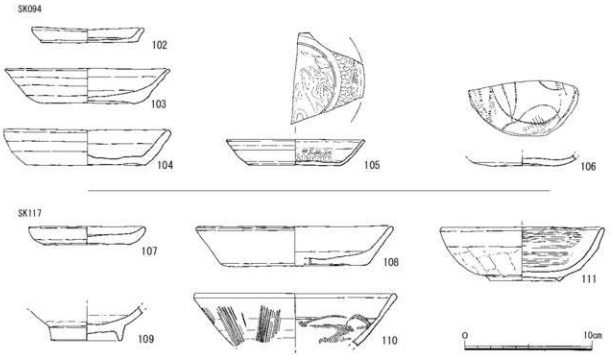
91 は龍泉窯系青磁碗の小片。胎土は灰白色で釉薬は灰オリーブ色。外面には工具により蓮弁文が描かれている。**92** はタコ壺か。残存率は 1/3 程度。灰黄褐色を呈し、胎土には白色粒を多く含む。内外面は指おさえの痕跡がみられる。**93** は管状の土錘。胎土は精良で明褐灰色を呈する。重量は 2.7g を測る。

SK091（第 14 図）

調査区中央部で検出した、平面不整円形の土坑である。直径 1～1.15m をはかる。標高 2 m で検出し、検出面から深さ約 0.85m で底となる。出土遺物から時期の詳細を判断するのは難しいが、12 世紀後半代には埋没した可能性が高い。

出土遺物（第 17 図）

94 は白磁碗。残存率は 1/6 程度。胎土は白色微粒子を含む灰白色。釉薬は灰白色で、外面体部下半以下は露胎となる。**95** は龍泉窯系青磁碗。残存率 1/6 程度で底部を欠損する。灰白色の胎土には白色・黒色の微粒子が含まれる。内面には櫛状工具で文様が描かれ、その上から灰色オリーブ色の釉薬がかけられている。**96** は龍泉窯系青磁碗の底部片。1/4 程度残存する。胎土は白色・黒色微粒子を含む青灰色で、緑灰色の釉薬が内面および畳付以外の外面に施される **97** は石製品。中央部の凹部に磨った痕跡が明瞭に残る。重量は 214g を測る。



第 18 図　SK094・117 出土遺物 実測図（S=1/3）

SK092（第 14 図）

調査区南西隅で検出した、平面円形の土坑である。南側は調査区外へと続く。直径はおよそ 0.8m。標高 1.8m で検出し、検出面から深さ約 0.65m で底となる。出土遺物から 13 世紀前半代には埋没したと考えられる。

出土遺物（第 17 図）

98 は土師器小皿。残存率 1/3 程度。明褐灰色を呈し、胎土には白色粒を含む。底部は回転糸切りで切り離されている。全体にススが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。**99・100** は龍泉窯系青磁碗。**99** は体部を 2/3 程度欠損する。胎土は灰白色で精良。外面に工具を用いて蓮弁文を描いている。灰オリーブ色の釉薬が畳付にまで施されている。**100** は残存率 1/6 程度。黒色微粒子を含む浅黄橙色の胎土に、灰オリーブ色の釉薬をかけている。外面には工具による蓮弁文が描かれている。**101** は陶器の盤。残存率は 1/8 程度。胎土は白色微粒子を含むにぶい橙色で、灰白色の釉薬がかけられている。

SK094（第 14 図）

調査区南西隅で検出した、北東－南西方向に長軸をもつ平面不整楕円形の土坑である。SK088 に切られる。長軸は南北 1m、短軸 0.8m を測る。標高 2m で検出し、検出面から深さ 0.5m で底となる。埋土は黒褐色砂。出土遺物から時期の詳細を判断するのは難しいが、12 世紀後半代に埋没したと考えられる。

出土遺物（第 18 図）

102 は略完形の土師器小皿。にぶい黄橙色で、底部は回転糸切りで切り離されている。胎土には白色粒が含まれる。内底部は回転横ナデの後、定方向のナデ調整。**103・104** は土師器坏。**103** は残存率 1/2 程度。淡赤橙色を呈し、底部には回転糸切りの痕跡が残る。内底部は回転横ナデの後、ナデ調整されている。胎土は精良。**104** は完形。底部は回転糸切りで切り離され、板状圧痕がみられる。褐灰色で、胎土には白色粒を含む。

105 は白磁皿。残存率は 1/3 程度。灰白色の胎土は精良。内面全体に工具で文様が描かれている。釉薬は灰白色で、底部以外の全面にかけられ、貫入が入る。106 は同安窯系青磁皿の底部片。胎土は白色粒を少量含む灰白色を呈する。内面に櫛状工具で文様を描き、オリーブ灰色の釉薬をかける。底面は露胎である。

SK097（第 14 図）

2 区東半で検出した、直径約 0.75 m の略円形の土坑である。標高 2.1 m付近で検出し、検出面から深さ約 0.4m で底となる。出土遺物は少なく時期の判断が難しいが、周囲の遺構と同様に 12 ～ 13 世紀頃の所産と思われる。

SK117（第 14 図）

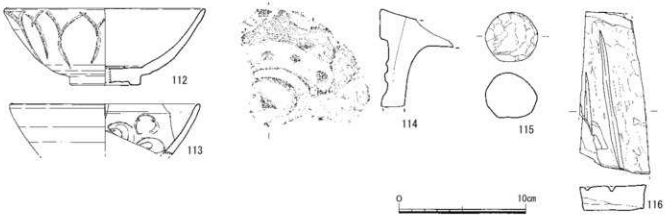
調査区北西部で検出した、平面不整方形の土坑である。北東－南西方向は最大 1.1m、北西－南東方向は 0.7m を測る。標高 2.05 m で検出し、検出面から深さ約 0.5m で底となる。出土遺物から 12 世紀後半代に埋没した可能性が高い。

出土遺物（第 18 図）

107 は 1/2 程度残存する土師器小皿。にぶい橙色で、胎土には白色粒を含む。底部は回転糸切りで切り離され、板目圧痕が残る。内底部は回転横ナデの後、定方向のナデ調整。108 は土師器坏。残存率は 1/4 程度で、にぶい橙色を呈し、胎土は精良。底部は回転糸切りの痕跡がみられる。109 は白磁碗の底部片。1/2 程度残存している。白色・黒色微粒子を含む灰白色の胎土に、灰色の釉薬をかけている。内外部は釉を輪剥ぎし、外面底部付近は露胎となる。110 は同安窯系青磁碗の破片。残存率は 1/3 程度。胎土は黒色微粒子が含まれ、灰白色を呈する。櫛状工具で内外面に文様を描き、明オリーブ灰色の釉薬をほどこしている。111 は略完形の瓦器碗。灰色から暗灰色を呈し、焼成は良好。胎土には白色粒を少量含む。外面坏部下半以下は連続的に工具による調整の痕跡がみられるが、内面から口縁部外面はヘラミガキしている。内底面に工具で暗文を描く。

③その他の出土遺物（第 19 図）

112 は鋤取り後の掘り下げで出土した龍泉窯系青磁碗の破片である。1/2 程度残存する。白色粒を含む胎土は浅黄橙色で、外面には工具で蓮弁文を描く。釉薬はにぶい褐色で、内面から高台外側まで全体的に施されている。焼成はややあまい。113 は撹乱から出土した龍泉窯系青磁碗の破片である。残存率は 1/6 程度。胎土は精良で灰色を呈する。内面に工具で文様を描き、オリーブ灰色の釉薬を全体にかける。



第 19 図　その他の出土遺物 実測図（S=1/3）

第 20 図　出土銅銭 X 線写真

114 は巴文の軒丸瓦片。胎土は精良で焼成も良好である。115 は球状の石製品。遊具か。全体を敲打して整形している。重量は 67g を測る。石材は砂岩か。116 は砥石。表面にも裏面にも使用痕が残る。重量は 227g を測る。

Ⅳ　おわりに

本地点では 2 面の調査を行い、14 世紀～近世頃、12・13 世紀頃の 2 時期を中心とする遺構が確認された。第 1 面は溝・土坑を検出したが、近世以降の遺構もあり、遺構密度も低く、状況が判然としない。

調査の主となった第 2 面では、土坑や柱穴などが比較的高い密度で検出され、多量の遺物が出土した。特に SK021 とした方形土坑からは、土師皿と坏、青磁皿と碗、白磁皿、天目碗、足鍋といった良好な資料が出土した。多数の柱穴は建物としてまとめることができなかったが、軸は一定方向に揃っており、現在の通りの方向とも概ね一致すると思われる。東に隣接する第 11 次調査では 13 世紀頃の井戸が複数確認されていたが、本地点では検出できなかった。第 2 面黄色砂の上面では一部焼土を含む縞状の整地層を確認したが、第 32 次調査等の周辺調査で確認されている焼土層と一連のものの可能性が高い。

今回の調査は約 100 ㎡という面積ではあるが、平安時代から鎌倉時代頃の遺構の状況が明らかになった。本地点周辺では新たな発掘調査も行われており、今後、箱崎遺跡北西縁辺部の様相が明らかになることを期待したい。

1．第１面１区全景（南から）

2．第１面２区全景（西から）

3．SD002（１区）完掘状況
（南から）

図版２

１．SK012・013 土層（東から）

２．第２面１区全景（南から）

３．第２面２区全景（西から）

１．第２面（２区）柱穴群
（北から）

２．SK021 完掘状況（西から）

３．SK088 遺物出土状況
（北から）

図版 4

1．SK091 完掘状況（北西から）

2．SK092 遺物出土状況(北から)

3．SK094 遺物出土状況(北から)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はこざき 69
書　　名	箱崎 69
副 書 名	箱崎遺跡第 116 次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1486 集
編 著 者 名	今井隆博
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒 810-8621　福岡市中央区天神 1-8-1
発行年月日	2023 年 3 月 23 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
はこざきいせき 箱崎遺跡 第 116 次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 ひがしく 東 区 はこざき 箱崎 3-3262-2	40131	2639	33° 37′ 12″	130° 25′ 24″	20210219 ～ 20210409	96	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡 第 116 次	集落	平安時代～江戸時代	土坑・溝・柱穴	土師器 中世陶磁器	12 ～ 13 世紀頃の 方形土坑を検出。

要　約	今回の調査地点は箱崎遺跡の西側斜面にあたり、周辺では、12 ～ 14 世紀頃の遺構・整地層が確認されている。地表から約 160cm で遺物包含層、180cm 付近で基盤の黄色砂となり、遺物包含層上面を第 1 面、黄色砂を第 2 面として調査を行った。黄色砂の標高は約 2.2 m をはかる。柱穴、土坑、溝を検出し、第 2 面では 2.7m × 2.2m の方形土坑が確認された。この第 2 面の黄色砂の上には焼土を含む整地層がみられた。周辺の調査でも確認されている焼土層と一連のものの可能性が高い。遺物は土師器や中国製陶磁器などがコンテナケース 25 箱分出土しており、第 1 面は 14 世紀～近世頃、第 2 面は 12 ～ 13 世紀頃と考えられる。

箱崎 69

―箱崎遺跡第 116 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1486 集

2023 年（令和 5 年） 3 月 23 日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
TEL（092）711-4667

印刷　有限会社 タスク
福岡市中央区赤坂 2-2-5
TEL（092）752-8341

『箱崎69』正誤表　　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1486集

頁	行/図	誤	正
抄録		所在地　箱崎3-3262-2	所在地　箱崎3-3263-2